

# 高梁の 近代化遺産 ④

## 吉岡銅山(1) その近代化以前

吹屋に銀山が開かれたのは大同二年。この西暦八〇七年開坑説の根拠は、寛政三（一七九一）年に、当時の銅山経営者・大塚理右衛門が久世代官に答申した「吉岡銅山の名称並番所道具建置之事」に記された一文。いわゆる『大塚家文書』が伝える「吉岡銅山之儀は、大同二年草創、発山にて千年に及び相続仕り



吹屋鉱山発祥の地・大深に近い白谷の間歩跡。吹屋にはこうした小間歩が多数残る。間歩とは鉱山の入口。たぬき掘りとは、地表に露出した鉱脈路頭を手で掘り下げた坑道。人一人が何と加れる、狸の穴程度の大きさ。

候（『成羽町史 通史編』）。大塚家は、孫一の時代から銅山稼業に携わった老舗。銀山として始まった吹屋鉱山は、室町時代に銅山となったという説が有力視されています。

「吉岡」の名前が登場するのは正保三（一六四六）年。備中倉敷代官・彦根平九郎の提唱によるといわれます。当時の佐渡金山で大量の金を産出した吉岡山にあやかたという伝承がある一方、佐渡に吉岡という地名はなかったと指摘する研究者もあります。いずれにせよ、大深を発祥の地とする銀山が室町時代に銅山となり、「石塔」、「関東」、「吉岡」へとその名前を変えていったようです。

吉岡銅山に中央資本が入ったのは天和三（一六八三）年。後に住友財閥となる泉屋が経営に参加します。銅山に限らず、地下資源採掘の難題は湧水対策です。掘削を人の手に頼っていた頃は、湧水にぶつかると間歩を変えていました。「たぬき掘り」です。泉屋は、倉敷大官・服部六郎左衛門にあてた「吉岡銅山産銅増益意見書」に、排水路を設けて湧水を逃がせば、採算のとれる銅山となると進言。

全長二百余間の大疎水道を開削します。それにより吉岡は再び西国一の銅山に再び咲きますが、泉屋は伊予の別子銅山に鞍替え。銅山経営は再び大塚家の司るところとなります。

明治六年。政府は太政官布告第二五九号で「日本鉱法」を公布地。地下資源の採掘に関する初めての法律を制定します。届け出により地上の掘削地を借り上げる「借区」制度を導入したのです。同年、土佐出身の岩崎弥太郎が「三菱商会」を設立。吉岡銅山の払い下げ



吉田六郎兼久は尼子家の家臣で吹屋村黄金山城主。大塚孫一と松浦五右衛門を請負人として銅山経営に当たられた。吉田の墓は吹屋中町の山中にある。碑銘の記述は「黄金山城主吉田六郎権頭兼久 清源寺院殿壽潤兼久大居士 永禄六癸亥十一月二十九日没」。「石塔銅山」の名は写真の宝篋印塔からきたといわれる。

を受けます。三菱にとって吉岡は初めての鉱山経営の地。吉岡にとつて三菱は住友に続く二番目の中央資本となります。

世界遺産暫定リストとなった「九州山口の近代化産業遺産群」の代表、長崎県端島。「軍艦島」の異名を持つ海底炭鉱のコンクリート島もまた三菱資本です。三菱はその後、福岡県の筑豊炭田、北海道の夕張炭鉱などへと経営を拡大してゆきます。住友、三菱、三井などの大財閥形成には、鉱山と金融機関の経営が必須であったといわれます。財閥・三菱の基礎には吉岡銅山があったといっても過言ではないと考えます。

（文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科准教授・小西伸彦さん）

編集と発行(毎月15日発行) 高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

再生紙を使用しています。